

# 数値計算法 (8)

---

担当：櫻井 鉄也，今倉 暁，二村 保徳

TA：加藤駿介

# 今日の講義内容

## □ 今日の授業

- 連立一次方程式
  - 連立一次方程式の概要
  - 行列とベクトルを用いた表現
- 数値解法
  - LU分解
  - 前進・後退代入

今日の授業

連立一次方程式

# 連立一次方程式の概要

## □ 連立一次方程式の例

### - 例：鶴亀算・怪獣算

- 鶴と亀がいます. 合わせて頭が8つ足が26本ありました. 鶴と亀はそれぞれ何匹いますか？

$$\begin{cases} \text{頭の式} & x + y = 8 \\ \text{足の式} & 2x + 4y = 26 \end{cases} \Leftrightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 2 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 8 \\ 26 \end{pmatrix}$$

- ゴジラとモスラとキングギドラがいます. 合わせて頭が8つ, 足が24本, 尻尾が4本ありました. ゴジラとモスラとキングギドラはそれぞれ何匹いますか？

$$\begin{cases} \text{頭の式} & x + y + 3z = 8 \\ \text{足の式} & 2x + 6y + 2z = 24 \\ \text{尻尾の式} & x + 2z = 4 \end{cases} \Leftrightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 3 \\ 2 & 6 & 2 \\ 1 & 0 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 8 \\ 24 \\ 4 \end{pmatrix}$$

# 連立一次方程式の概要

## □ 連立一次方程式の解の分類

### - 例 1

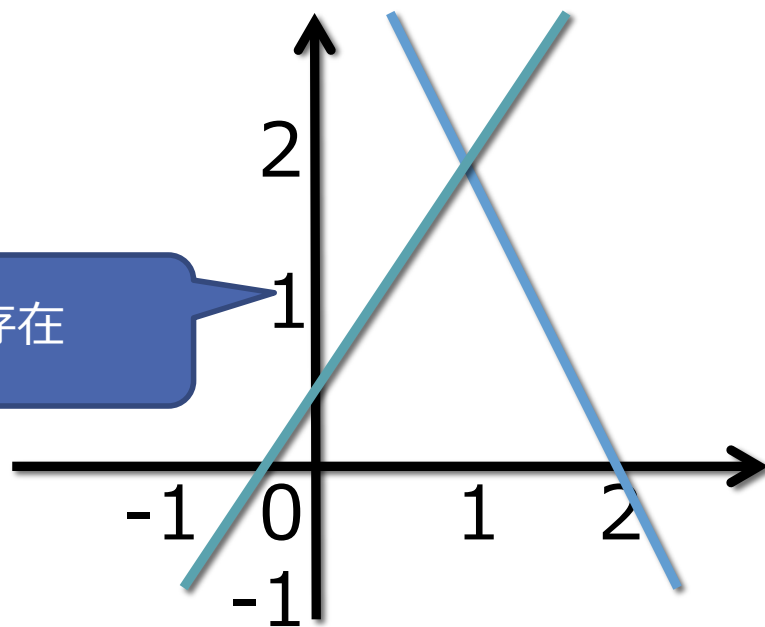
### - 方程式

$$\begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 3 & -2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 4 \\ -1 \end{pmatrix} \Leftrightarrow \begin{cases} 2x + y = 4 \\ 3x - 2y = -1 \end{cases}$$

### - 解（交点が解）

このとき2つの直線の交わる点が解。

解は唯一存在



# 連立一次方程式の概要

## □ 連立一次方程式の解の分類

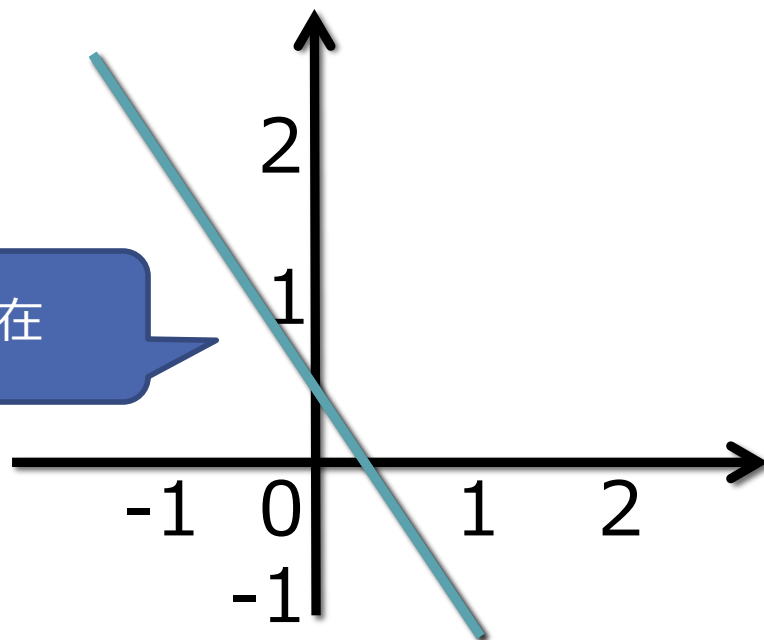
- 例 2

- 方程式

$$\begin{pmatrix} 3 & 2 \\ 6 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} \Leftrightarrow \begin{cases} 3x + 2y = 1 \\ 6x + 4y = 2 \end{cases}$$

- 解（交点が解）

解は無限に存在



2つの直線が重なる場合。

# 連立一次方程式の概要

## □ 連立一次方程式の解の分類

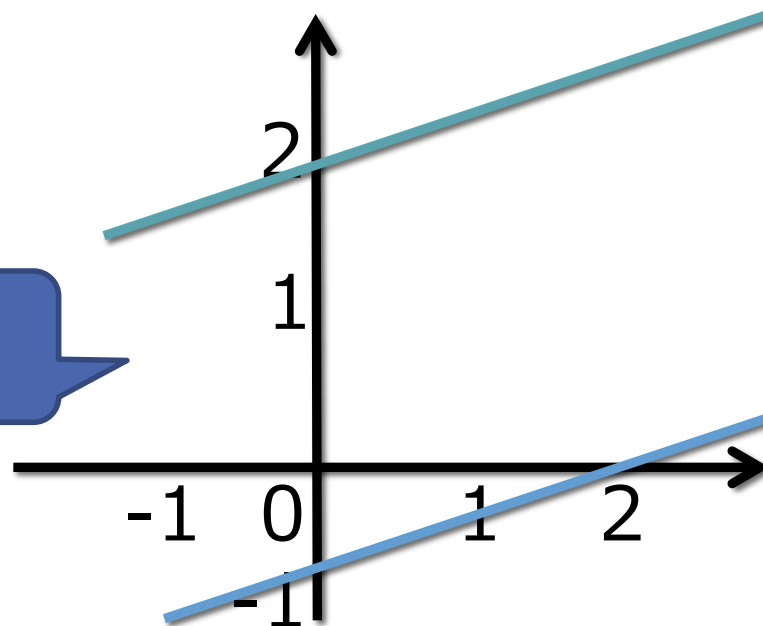
- 例 3

- 方程式

$$\begin{pmatrix} -1 & 3 \\ 2 & -6 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ -12 \end{pmatrix} \Leftrightarrow \begin{cases} -x + 3y = -2 \\ 2x - 6y = -12 \end{cases}$$

- 解（交点が解）

解は存在しない



このとき、2つの直線が平行であるため、交わらず解が存在しない。

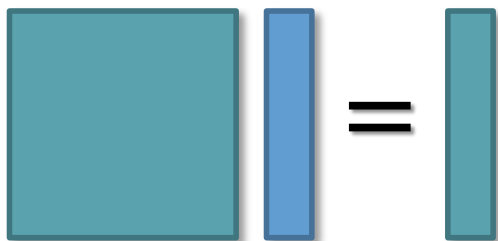
# 行列とベクトルを用いた表現

## □ 連立一次方程式の行列とベクトルを用いた表現

- 入力 :  $A \in \mathbb{R}^{n \times n}$ ,  $\mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$  出力 :  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$

$$\begin{cases} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{cases}$$

$$\Leftrightarrow \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$$

$$\Leftrightarrow \mathbf{A}\mathbf{x} = \mathbf{b}$$


一般に変数がn個の場合  
を行列とベクトルを  
用いて表現する。



# 連立一次方程式の分類

## □ 連立一次方程式の分類と解

- 係数行列  $A$  が正則
  - 解は唯一存在する:  $x = A^{-1}b$
- 係数行列  $A$  が特異かつ  $b \in \text{Ran}(A) := \{Ax | x \in \mathbb{C}\}$ 
  - $Ax_0 = b$  を満たす解  $x_0$  が存在する. また,  
 $x_0 + v, v \in \text{Ker}(A) := \{x | Ax = 0\}$  も解である.
- 係数行列  $A$  が特異かつ
  - 解は存在しない.  $b \notin \text{Ran}(A) := \{Ax | x \in \mathbb{C}\}$

# 連立一次方程式の数値解法

# 連立一次方程式の数値解法

## □ 連立一次方程式の分類と解

- 係数行列  $A$  が正則

- 解は唯一存在する:  $\boldsymbol{x} = A^{-1}\boldsymbol{b}$

- $\boldsymbol{x} = A^{-1}\boldsymbol{b}$  の (数学的な) 計算法

- 逆行列を陽的に計算

$$C = A^{-1} \rightarrow \boldsymbol{x} = C\boldsymbol{b}$$

- Cramerの公式

$$x_i = \frac{\det A_i}{\det A} \quad A_i = [a_1, \dots, a_{i-1}, \boldsymbol{b}, a_{i+1}, \dots, a_n]$$

- どちらも計算量が多すぎるため行うべきではない

ここでの「陽的に計算」とは、 $C$ を2次元配列として計算して保持したのち、 $C$ と $\boldsymbol{b}$ の積を計算するという意味。

# 連立一次方程式の数値解法

## □ 直接法と反復法

- 直接法：有限回の演算で解を計算

$$A \mathbf{x} = \mathbf{b} \longrightarrow \mathbf{x}$$

- 係数行列の分解に基づく

- 反復法：解に収束する近似解列を逐次的に生成

$$\mathbf{x}_0 \rightarrow \mathbf{x}_1 \rightarrow \mathbf{x}_2 \rightarrow \cdots \rightarrow \mathbf{x}_{k-1} \rightarrow \mathbf{x}_k \approx \mathbf{x}$$

- 定常反復法（Jacobi法など）
- Krylov部分空間法（共役勾配法など）
- その他

直接法には後述するガウスの消去法やLU分解を用いた方法などがある。

本講義では直接法について説明する。

# 連立一次方程式の数値解法

## □ Gaussの消去法

- 行列の基本変形（行の定数倍と和）により

$$\begin{cases} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{cases}$$

を上三角化する

- 1行目を  $-\frac{a_{21}}{a_{11}}$  倍し、2行目に加える→(2,1)要素がゼロに

$$\begin{cases} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ \text{ゼロ} \quad a_{22}^{(2)}x_2 + \cdots + a_{2n}^{(2)}x_n = b_2^{(2)} \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{cases}$$

# 連立一次方程式の数値解法

## ■ Gaussの消去法

- 行列の基本変形（行の定数倍と和）により

$$\begin{cases} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n = b_2 \\ \vdots \\ a_{n1}x_1 + a_{n2}x_2 + \cdots + a_{nn}x_n = b_n \end{cases}$$

を上三角化する

- 1ステップ目（1列目の2行目以降を消去）

$$\begin{cases} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n = b_1 \\ \boxed{\text{ゼロ}} + a_{22}^{(2)}x_2 + \cdots + a_{2n}^{(2)}x_n = b_2^{(2)} \\ \vdots \\ a_{n2}^{(2)}x_2 + \cdots + a_{nn}^{(2)}x_n = b_n^{(2)} \end{cases}$$

前ページと同様に、一番下の行まで1列目の項をゼロにしていく。

# 連立一次方程式の数値解法

## □ Gaussの消去法

- 行列の基本変形（行の定数倍と和）により

$$\left\{ \begin{array}{cccccc} a_{11}x_1 & + & a_{12}x_2 & + & \cdots & + & a_{1n}x_n & = & b_1 \\ a_{21}x_1 & + & a_{22}x_2 & + & \cdots & + & a_{2n}x_n & = & b_2 \\ & & & & \vdots & & & & \\ a_{n1}x_1 & + & a_{n2}x_2 & + & \cdots & + & a_{nn}x_n & = & b_n \end{array} \right.$$

を上三角化する

- 2ステップ目（2列目の3行目以降を消去）

$$\left\{ \begin{array}{cccccc} a_{11}x_1 & + & a_{12}x_2 & + & \cdots & + & a_{1n}x_n & = & b_1 \\ \text{ゼロ} & & a_{22}^{(2)}x_2 & + & \cdots & + & a_{2n}^{(2)}x_n & = & b_2^{(2)} \\ \text{ゼロ} & & & & \vdots & & & & \\ & & & & & & a_{nn}^{(3)}x_n & = & b_n^{(3)} \end{array} \right.$$

# 連立一次方程式の数値解法

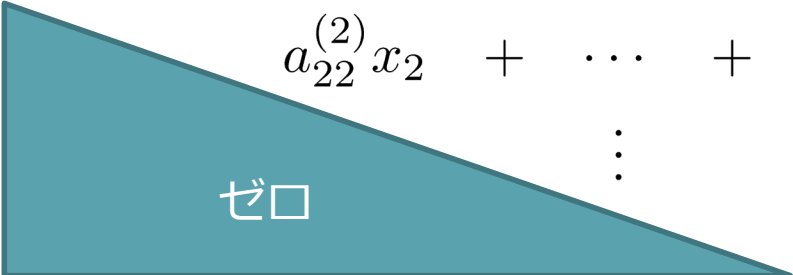
## □ Gaussの消去法

- 行列の基本変形（行の定数倍と和）により

$$\left\{ \begin{array}{cccccc} a_{11}x_1 & + & a_{12}x_2 & + & \cdots & + & a_{1n}x_n & = & b_1 \\ a_{21}x_1 & + & a_{22}x_2 & + & \cdots & + & a_{2n}x_n & = & b_2 \\ & & & & \vdots & & & & \\ a_{n1}x_1 & + & a_{n2}x_2 & + & \cdots & + & a_{nn}x_n & = & b_n \end{array} \right.$$

を上三角化する

- n-1ステップ目（n-1列目のn行目を消去）

$$\left\{ \begin{array}{cccccc} a_{11}x_1 & + & a_{12}x_2 & + & \cdots & + & a_{1n}x_n & = & b_1 \\ & & a_{22}^{(2)}x_2 & + & \cdots & + & a_{2n}^{(2)}x_n & = & b_2^{(2)} \\ & & & & \vdots & & & & \\ & & & & & & a_{nn}^{(n)}x_n & = & b_n^{(n)} \end{array} \right.$$




# 連立一次方程式の数値解法

## □ 後退代入

- 上三角化された連立一次方程式を、 $x_n$ から順に後退方向に代入し解く

$$\left\{ \begin{array}{lcl} a_{11}x_1 + \cdots + a_{1,n-1}x_{n-1} + a_{1n}x_n & = & b_1 \\ \vdots & & \\ a_{n-1,n-1}^{(n-1)}x_{n-1} + a_{n-1,n}^{(n-1)}x_n & = & b_{n-1}^{(n-1)} \\ a_{nn}^{(n)}x_n & = & b_n^{(n)} \end{array} \right.$$

- $x_n = b_n^{(n)} / a_{nn}^{(n)}$
- $x_{n-1} = (b_{n-1}^{(n-1)} - a_{n-1,n}^{(n-1)}x_n) / a_{n-1,n-1}^{(n-1)}$
- $x_k = (b_k^{(k)} - a_{k,k+1}^{(k)}x_{k+1} - \cdots - a_{k,n}^{(k)}x_n) / a_{kk}^{(k)}$

# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解

- 係数行列  $A$  を2つの行列  $L$  と  $U$  の積

$$A = LU \quad \boxed{A} = \boxed{L} \boxed{U}$$

に分解する

- $L$ : 対角要素が全て1の下三角行列  
(下三角行列: 対角より上の要素が全てゼロの行列)
- $U$ : 上三角行列 (対角より下の要素が全てゼロの行列)

# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解による連立一次方程式の求解

- 係数行列  $A$  のLU分解を用いると、連立一次方程式は

$$Ax = b \quad \longrightarrow \quad LUx = b$$

と表される

- ここで、 $y = Ux$  と置くと

$$L(Ux) = Ly = b$$

となり、この方程式を  $y$  について解き、次いで以下を解く

$$Ux = y$$

- $L$ ,  $U$ は三角行列であるため、前進・後退代入を用いて、簡単に解くことができる

# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解の計算法

- Gaussの消去法の行列形式での表現（に近い）
- 行列  $P_{ij}(\alpha), i \neq j$  を

$$P_{ij}(\alpha) := I + \alpha \mathbf{e}_i \mathbf{e}_j^T$$

と置く．ここで,  $I$  は単位行列、 $\mathbf{e}_i$  は単位ベクトルである

- $A$  の第  $j$  行に  $\alpha$  をかけて、第  $i$  行に加える操作

$$P_{ij}(\alpha)A = A + \alpha \mathbf{e}_i \mathbf{e}_j^T A$$

Aの第  $j$  行目を取り出す

$i$ 行目に第  $j$  行目の値を並べる

# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解の計算法

-  $e_j^T A$

$$\begin{matrix} & j \\ \cdots & 0 & 1 & 0 & \cdots \end{matrix} \begin{matrix} \square \\ \text{A(j,:)} \\ \square \end{matrix} =$$

-  $e_i(e_j^T A)$

$$\begin{matrix} i \\ \begin{matrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{matrix} \end{matrix} \begin{matrix} \square \\ \text{A(j,:)} \\ \square \end{matrix} = \begin{matrix} i \\ \begin{matrix} \square \\ \text{A(j,:)} \\ \square \end{matrix} \end{matrix}$$

# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解の計算法

$$- P_{ij}(\alpha)A = A + \alpha \mathbf{e}_i \mathbf{e}_j^T A$$

$$= \begin{matrix} \boxed{A} \end{matrix} + \begin{matrix} \boxed{\phantom{0}} \end{matrix} \begin{matrix} i \\ \boxed{A(j,:)} \end{matrix}$$

$A$  の第  $j$  行に  $\alpha$  をかけて、  
第  $i$  行に加える操作

# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解の計算法

- A に対し,  $P_{ij}(\alpha)$  を左から順に作用させることで、  
上三角行列  $U$  を生成する  
(Gaussの消去法と同じ手順)

$$P^{(k)}(\alpha^{(k)}) \cdots P^{(1)}(\alpha^{(1)}) A = U$$

- 作用させた  $P_{ij}(\alpha)$  の積 (の逆行列) から下三角行列  $L$  が生成される

$$A = \left( P^{(k)}(\alpha^{(k)}) \cdots P^{(1)}(\alpha^{(1)}) \right)^{-1} U = LU$$

# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解の計算法

### - 具体例

$$A = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & -1 \\ -1 & 1 & -1 \end{bmatrix}$$

$$\alpha_{21} = -\frac{a_{21}}{a_{11}}$$

- (2,1)要素の消去：  $P_{2,1}(-1/2)$  を  $A$  に左からかける
- (3,1)要素の消去：さらに  $P_{3,1}(1/2)$  を左からかける
- 以上の操作を以下のように書く

$$\alpha_{31} = -\frac{a_{31}}{a_{11}}$$

$$M^{(1)} = P_{3,1}(1/2)P_{2,1}(-1/2)$$

$$A^{(1)} = P_{3,1}(1/2)P_{2,1}(-1/2)A = M^{(1)}A$$



# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解の計算法

- つづき

- 同様に、第2列の消去を行う行列を  $M^{(2)}$  とし、消去後の行列を

$$A^{(2)} = M^{(2)} A^{(1)} = M^{(2)} M^{(1)} A$$

とする. ここで,  $A^{(2)}$  は上三角行列となる.

- $U = A^{(2)} = M^{(2)} M^{(1)} A$  および  $L = (M^{(2)} M^{(1)})^{-1}$

と置くと,

$$A = (M^{(2)} M^{(1)})^{-1} U = LU$$

と表される.

- $P_{ij}$  ( $i > j$ )は下三角行列なので、 $L$ は下三角行列になる

$\alpha$ の値は $A^{(1)}$ から決定する

# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解の計算法

### - 注意

- 実際にLU 分解を行うときには、行列  $P_{ij}(\alpha)$  を陽に A にかけるような計算は行わず、行同士の消去の計算を行う。
- また、L の計算でも  $M^{(1)}$  などの逆行列を計算することはしない。

- 代わりに行列  $P_{ij}(\alpha)$  の性質を利用する

$$P_{ij}^{-1}(\alpha) = \boxed{\quad ? \quad}$$

$$P_{i'j}(\alpha')P_{ij}(\alpha) = \boxed{\quad ? \quad}$$

$P_{ij}$ の性質を利用すると  $P_{ij}$ の逆行列とベクトルの積は簡単に計算できる。

どのように計算するのだろうか？

# 連立一次方程式の数値解法（再掲）

## □ LU分解の計算法

$$- P_{ij}(\alpha)A = A + \alpha \mathbf{e}_i \mathbf{e}_j^T A$$

$$= \begin{matrix} \boxed{A} \end{matrix} + \begin{matrix} \boxed{\phantom{0}} \end{matrix} \begin{matrix} i \\ \boxed{A(j,:)} \end{matrix}$$

先ほど示したスライドの式を思い出す。

$A$  の第  $j$  行に  $\alpha$  をかけて、  
第  $i$  行に加える操作

# 連立一次方程式の数値解法

## □ LU分解の計算法

### - 注意

- 実際にLU 分解を行うときには、行列  $P_{ij}(\alpha)$  を陽に A にかけるような計算は行わず、行同士の消去の計算を行う。
- また、L の計算でも  $M^{(1)}$  などの逆行列を計算することはしない。
- 代わりに行列  $P_{ij}(\alpha)$  の性質を利用する

$$P_{ij}^{-1}(\alpha) = P_{ij}(-\alpha) = I - \alpha \mathbf{e}_i \mathbf{e}_j^T$$

$$P_{i'j}(\alpha') P_{ij}(\alpha) = I + (\alpha \mathbf{e}_i + \alpha' \mathbf{e}_{i'}) \mathbf{e}_j^T$$

実は $P_{ij}$ に $-\alpha$ を入れたものが $\alpha$ を入れたものの逆行列になる。実際にかけて単位行列になるか確かめてみると良い。

また。異なる $\alpha$ 、 $i$ の $P_{ij}$ の積はこのように表すことができる。

# 連立一次方程式の数値解法

## □ 前進・後退代入

- 具体例  $A x = L U x = b$

$$\begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & -1 \\ -1 & 1 & -1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1/2 & 1 & 0 \\ -1/2 & 1 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 0 & 3/2 & -3/2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}$$

- Step 1

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1/2 & 1 & 0 \\ -1/2 & 1 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}$$

- Step 2

$$\begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 0 & 3/2 & -3/2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix}$$

# 連立一次方程式の数値解法

## □ 前進・後退代入

### - 前進代入

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1/2 & 1 & 0 \\ -1/2 & 1 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{bmatrix}$$

### - $y_1, y_2, y_3$ の順に代入計算する

$$\begin{cases} y_1 = b_1 \\ y_2 = b_2 - 1/2y_1 \\ y_3 = b_3 + 1/2y_1 - y_2 \end{cases}$$

$$y_i = \left( b_i - \sum_{j=1}^{i-1} l_{ij} y_j \right), \quad i = 1, 2, \dots, n$$

# 連立一次方程式の数値解法

## □ 前進・後退代入

### - 後退代入

$$\begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 0 & 3/2 & -3/2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix}$$

### - $x_3, x_2, x_1$ の順に代入計算する

$$\begin{cases} x_3 = y_3 \\ x_2 = (y_2 + 3/2x_3)/(3/2) \\ x_1 = (y_1 - x_2 - x_3)/2 \end{cases}$$

$$x_i = \left( y_i - \sum_{j=i+1}^n u_{ij} x_j \right) \times \frac{1}{u_{ii}}, \quad i = n, n-1, \dots, 1$$

# 連立一次方程式の数値解法

## □ 前進・後退代入

- 一般に行列の次元が  $n$  の場合、 $L y = b$  の解  $y = [y_1, y_2, \dots, y_n]^T$  は以下で求められる

$$y_i = \left( b_i - \sum_{j=1}^{i-1} l_{ij} y_j \right), \quad i = 1, 2, \dots, n$$

- また、方程式  $U x = y$  の解  $x = [x_1, x_2, \dots, x_n]^T$  は以下で求められる

$$x_i = \left( y_i - \sum_{j=i+1}^n u_{ij} x_j \right) \times \frac{1}{u_{ii}}, \quad i = n, n-1, \dots, 1$$